



養父市長 梅谷 馨

新春をご家族おそろいでお迎えになり、心からお喜び申し上げます。

新春を迎え、それぞれのご家庭で何を実行に移すのか、話し合いを持たれることも大切なことではないかと思えます。

戦後60年を経過した今、わが日本は生活こそ豊かになりましたが、非常に心寂しい国になってきているのではないのでしょうか。親が子を、子が親を殺すといった凄惨な事件が多発しています。一昨年に東京の歯科医師宅で起きた殺人事件は、殺害された女子短大生の兄の犯行でした。

立派な家があっても、そこには家族を結びつける家庭がなく、すべてが分断されて、親子の意味、家族の意味がなくなっているとさえ思われます。「父母がいて、子どもがいて、そこには強いきずなと信頼関係がある」という家庭を築いていかなければなりません。

養父市では、「響きあう心 拓く明日 但馬中央の郷」をまちの将来像に掲げています。養父市においては、強いき

ずなと信頼関係がある家庭ばかりだと思いますが、今後心も響きあう家庭、地域にしていきたいものです。

さて、本年3月で養父市が誕生して94年となります。財政的に厳しいことに変わりはありませんが、厳しい中でも、生活に欠かせない道路網の整備を着実に進めています。特に、北近畿豊岡自動車道が4年後を目途に八鹿まで開通し、同自動車道の開通を見込みながら建設した「道の駅ようか但馬蔵」にもぎわいを見せています。この他にも、養父市の企業誘致第1号となる通信制のウイザスナビ高等学校が、この4月に開校しますし、旧西谷小学校への企業誘致も決定するなど明るいニュースもあります。

さらに、懸案でありました八鹿中と青溪中との統合中学校の建設については、昨年の暮れに校名も「八鹿青溪中学校」と決定し、平成22年の開校に向けて工事が始まりました。

養父市では、引き続き皆様のご協力をいただきながら行財政改革を進め、基礎をしっかりと固めていかなければなりません。今までの行財政改革により、徐々に明るい兆しも見えつつありますが、さらに努力し、市と市民の皆様が一体となって、よりよい養父市づくりを推し進めなければなりません。

市民の皆様のご支援とご協力をお願いし、年頭のごあいさつといたします。



養父市議会議長 吉井 稔

新年明けましておめでとうございませう。新しい年に希望をもち、ご壮健にてお迎えにられましたこと、心から喜び申し上げます。

養父市が誕生して5年目を迎えます。他の自治体よりも早く合併した効果によって独自の行財政改革が進み、着実に「自立」に向けて歩んでいます。

今年、議会議員選挙が行われます。この間、議員報酬のカット(10%)、日当などの手当の廃止、政務調査費すべてへの領収書添付などについて条例議決しました。また、議会独自の発議として、議員定数の削減、独自の調査と研究による政策提言を目指した会派制の導入、養父市の財政計画や事業などについて全般の調査と研究を行う「行財政改革調査特別委員会」の設置など、他に先駆けて議会改革に取り組んできました。

これらは、国の制度改革などによる地方交付税の減額、さらに人口密度が低く、少子高齢化が進む養父市の実情を勘案し、議会議決したものです。

現在、全国の自治体が行財政改革に取り組んでいます。昨年12月、総務省から自治体財政健全化の新基準として4つの指標が示されました。さらに、兵庫県が公表した新行政改革プランは、市民生活に直結したものが多く、養父市も新たな財政負担を迫られる可能性があり、大変危惧しているところです。

厳しい財政事情の中でも、公立八鹿病院新築事業や道の駅ようか但馬蔵が完成し、また平成22年4月の開校に向けて着工した八鹿青溪中学校、本年4月に旧大谷小学校に開校するウイザスナビ高等学校、さらに旧西谷小学校跡地への企業誘致など、明るい話題もあります。また、養父市の大きな行政課題である南但ごみ処理施設建設、斎場の新築、給食センターの統合など、今後の財政状況を勘案しつつ、円滑な事業実施が期待されます。

国、県の制度が刻々と変化している中で、お金が無くても自分たちの知恵を出し合い、自分たちでできる必要な事業を、市民の皆様のご理解をいただきながら行う必要があります。

まるごと自然で田舎の養父市。苦しんでも自分たちの夢や希望をしっかりと持ち、笑顔で元気な養父市づくりに努力していきたいものです。

最後になりましたが、市民の皆様のご健康とご多幸をご祈念し、新年のごあいさつといたします。